

諦崇寺報

行持報恩

「行持」を読み下すと「行いを持つ」ですが、「持つ」は「もつ」と読むより「たもつ」と読むほうが判りやすいと思います。お経『修証義』第五章の題にもなっています。なお、入学式や運動会といった「行事」とは違います。

「行い」、これは「自分の父母や祖父母、先生や先輩が教えてくれた行い」です。私の母は20年前に亡くなりましたが、いまだに「扉を開けたら閉める。水を出したら止める。電気は点けたら消す。ゴミが落ちてたら拾う」と耳元で声が聞こえます。そうして教えて貰った行いを私が続けたならば「行いをたもつ」ことになります。けれども本当はそれだけでは「たもつ」ことが出来ません。なぜなら私も母と同じく、やがて去ってゆくからです。ではどうすれば良いか。本当の意味で「たもつ」ためには、母が私に伝えてくれたように、私も次の世代へ伝えなければなりません。



2001年、私が首座を勤めた法戦式で、栗東寺住職から竹篋を預かり、問答に臨もうとする場面。仏教は血縁に拠らぬ、法脈を繋ぐために行持を重んじます。仏さまとしての行いを持って日々を送る、行持こそが仏道修行です。

発行編集
藤井崇文
〒631-0065
奈良市鳥見町
2丁目28-10
0742(37)2569
taisouji.jp



褒められても 褒められなくても

永平寺78世、宮崎奕保禅師
「自然は立派やね。」

わたしは日記をつけておるけれども、何月何日に花が咲いた、何月何日に虫が鳴いた、ほとんど違う。

規則正しい。

そういうのが法だ。

法にかなったのが大自然だ。

法にかなっておる。

だから自然の法則をまねて人間が暮らす。

人間の欲望に従っては迷いの世界だ。

真理を黙って実行するというのが大自然だ。

誰に褒められるということも思わんし、これだけのことをしたらこれだけの報酬がもらえるということもない。

時が来たならば、ちやんと花が咲き、そして黙って、褒められても褒められなくても、すべきことをして黙って去っていく。

そういうのが実行であり、教えであり、真理だ。」

『永平寺104歳の禅師』

NHKスペシャル2004年



明珠は掌にあり

「大切なものは、すでに手の平にある」という意です。私たちがすでに持っている知識や手段、大切な宝物になぜ気付かないのか、それが問題です。

子供が走って転んだとき、血は出ていないよ、骨は折れてないよ、

大丈夫だからとだめでも、泣いて叫ぶ子供には通じません。正気を失って、聞く耳を持たないからです。そんなときはおまじない。「痛い痛い飛んでけー」



わりと真面目に、いまの日本で必要なのはこれだと思います。転んだ子供で例えましたが、大人のほうがもっと聞く耳を持ちません。私たちは科学を希求しながらも、自分の中から生まれてくる非科学に翻弄されます。それでも正気を失ってはなりません。

正気を失いそうなとき、大人は自分で喝を入れるのです。完全に正気を失ったひとには、誰かが喝を入れねばならないでしょう。

そうして喝を入れて、何を目的にしているか、何を恐れているか、何をしているか、自分の手の平に何を持っているか、ハッと気付かねばなりません。

私たちは自分の父母や曾祖父母、先生や先輩からすでに多くを受け継いでいます。すでにたくさんの知識や手段、大切な宝物を持っています。早くそれに気が付いて、思い出して、次にどう生かすか、どう使うかが本当の、肝心な問題なのです。

泣き叫び正気を失うときは終わりました。

明珠を携え、次に進みましょう。

あとがき

子どもの頃、私が好きと言ったお菓子がかり買ってきてくれた母。しまいは「もう勘弁して〜」が毎度でした。母の優しさと懸命さを感じます。 崇文拝